

商店街を歩いていると、「鳥肉屋」と看板を掲げている店を見つけたことがある。売っているのは鶏肉のさまざまな部位だけだが、昔は野鳥も扱っていたのかもしれない。そんなことに思い至るのは、『鷹將軍と鶴の味噌汁』を読んだからだろう。江戸時代を中心に、数十年前まで普通であった鳥肉食文化について描いた本なのだ。

大正時代から昭和にかけて宮内省（現宮内庁）に勤めた鷹匠は、鴨肉でおいしいのは小鴨、真鴨、尾長、カルガモの順でそれ以外のものはおいしくない、と味の違いを熟知していた。また、夏目漱石は『虞美人草』で、明治の文豪たちが愛した上野の老舗雁鍋屋が明治39年に廃業したことを、わざわざ哀惜の念を書き記している。

鳥肉食文化が最も発達したのは江戸時代。高級食材にも大衆料理の食材にもなり、將軍から庶民ま

菅 豊著

江戸を魅了した鳥肉食文化

でが虜（わらわ）になった。滋養があり、贈答品としても喜ばれた。階級を認める指標であり、政治も動かした。儲かる商品でもあった。

しかし、綱吉の時代に生類憐れみの令が発令され、鳥商売は禁止されていた。綱吉は、鷹狩まで止めてしまっ。ところが鷹狩は、単なる將軍の趣味ではなかった。

將軍が狩りを行う鷹場は庶民の

鳥猟が禁止され、役人が巡回し監視する仕組みがあった。そのことが、生類系の維持にも役立っていた。將軍の獲物や鷹場は、諸大名に下賜される。大名は、鷹場を利用して、獲物を將軍や家中に贈った。將軍を頂点とする、権威の維持にも役立っていたのだ。

綱吉が鷹狩を止めたことで鷹場の管理は弱体化し、綱吉の死後鳥

商売が自由になると、鳥の乱獲が始まる。鷹狩を再興した吉宗は、何度も取り締まりの強化を試みた。鳥商売ができる人数を制限し、トレーサビリティシステムまで作り監視システムを構築したが、密猟はなくならなかった。庶民の間では密売人が英雄視され、武勇伝が語り継がれるようになる。やがて幕府は弱体化し、終焉の時を迎える。鷹場は廃止され、鳥贈答のシステムもなくなり、鳥食文化も衰退に向かう。

五代目將軍が鷹狩を止めたことが、幕府の権威を弱める発端となつたのか？ そんなことまで夢想してしまうのは、思いがけない江戸時代の姿が、浮かび上がってきたからだろう。

《評》生活史研究家 阿古 真理

菅 豊

鷹將軍と鶴の味噌汁

江戸の鳥の美食学

講談社文庫



（講談社・1980円）

すが・ゆたか 63年長崎
県生まれ。東京大学教授。
専門は民俗学。著書に『修
験がつくる民俗史』『川は
誰のものか』など。

《評》生活史研究家 阿古 真理